時評

ペンネームと短歌の未来

高山邦男

ペンネームは雅号とも言い昔の芸術家は付ける人が多かった。少し挙げてみると漱石、子規、啄木、白秋、虚子、これらはみな雅号である。どうして、こうした雅号を付けるかと言えば、名前に自分のあり方を込めたり、実際の自分と区別しプライベートを守るとか、様々な理由があると思うが、何となく格好いいからということもあるように思う。早稲田大学に在学中、クラスメートの北原射水(白秋)、中村蘇水、若山牧水は「早稲田の三水」と気取っていたようで記念の写真が残っている。まだ、無名だった白秋や牧水たちも将来の自分たちの活躍を夢見ていたのだろう。これと同じような話を竹柏会の同朋の黒岩剛仁から聞いた。剛仁はペンネームで高校生の時、考えた名前だという。色々と拘りを聞いたが、芸能人に憧れる人がサインを練習したり、芸名を考えたりするような気分や今と違う自分になる志のようなものがあったと思う。ちなみに（たけよし）と読むのだが、教えられなければ誰も読めないので（ごうじん）が通称になっていた。

また、最近話題になっている選択的夫婦別姓問題にも関連するが、結婚して姓が変わった女性がそのまま旧姓を使用している人がいる。身近な所で申し訳ないが、大口玲子、山口明子はこのケースで、本名は別にある。逆に、五島茂は結婚前は石樽茂で、本名に合わせて名前を変えている。

それぞれに事情や思いがありそうだが、本名を通すという王道を行く人もいて、雅号が多かった時代の代表選手としては佐佐木信綱を挙げておきたい。元々、綱という字を受け継いできた名前なので、名前自体に伝統の重さを感じさせる。

ただ、現在のペンネーム事情として新たな問題が生じていると考えている。最近、「心の花」の投稿で「彼女募集中」というペンネームで投稿してきた方がいた。自分の名前なのだから他人からとやかく言われる筋合いはないと言われればその通りなのだが、私なりの問題点を指摘しておきたい。一生この名を通すぐらいの覚悟があるのならそれもいいと思うが、いかにも軽い。彼女が出来たら「彼女と熱愛中」とでも改名するのであろうか。ラジオのペンネームなら一発芸的な面白さがあってもいいが、歌人はそれでいい訳がない。また、匿名性の高さも気になる。どんな人の作品か分からないという事は限りなく詠み人知らずに近づいていくので、作者名の力が弱くなる。個人情報である本名には世間から逃げていないという強さが込められているのだ。

今、生成ＡＩが急速に発達していく時代に未来を見渡せば、短歌だってそれなりの学習をすればそれなりの作品を作れるようになるだろう。将棋だって囲碁だってもうＡＩに勝てる棋士はいない。その時に何が重要になるかと言えば、実際にわれわれが存在すること、実際に会って切磋琢磨する物語があること、つまり〈われ〉の現場があることが重要になってくる。将棋や囲碁も勝敗だけではなく生身の人間が戦うという現実の物語があるから面白いのである。実社会で苦労しながら働いている、歌会に出て批評し合う、そうした実際に我々が生きている現場を背負う事が作者名の必要な役割になってくると私は思うのである。